

再再論 *Te*-形子句

湯廷池

佐伯真代

輔仁大學外國語文學院 致理技術學院應用日語系

講座教授

專任講師

摘 要

本文所討論的 *Te*-形子句 (*Te*-clause)，除了以最核心的動詞來充當述語的 *Te*-形動詞子句 (*V-Te* clause) 以外，還包括以形容詞來充當述語的 *kute* 形形容詞子句 (*A-kute* clause)、形容名詞 (adjective noun = AN) 來充當述語的 *de* 形形容名詞子句 (*AN-de* clause)、與以名詞來充當述語的 *de* 形名詞子句 (*N-de* clause)，探討其音韻形態、句法結構以及語意功能。關於 *Te*-形子句的句法結構，由其子句裡面的成分來看，我們認為 *Te*-形子句是主要語含有非限定形(non-finite)的非限定子句 (non-finite clause)，與主句共現，只有副詞子句或補語子句的功能。當 *Te*-形子句有副詞子句的功能時，其作用為修飾主句述語；而當 *Te*-形子句有補語子句的功能時，動貌動詞等則成為 *Te*-形子句的上位述語 (matrix predicate)。

此外，我們按照以下兩種素性和兩種值來嘗試了交叉分類(cross-classification) 以釐清作為副詞子句的 *Te*-形子句和主句的語意關係。第一個素性是，*Te*-形子句和主句之間是否存在著〈並行〉的關係 ([+並行] 或 [-並行])，而第二個素性則是，兩者之間是否允許〈獨立主語〉([+獨立主語] 或 [-獨立主語])。我們所得到的結論是：作為副詞子句的 *Te*-形子句可分為〈同時並行〉、〈前後繼起〉、〈因果繼起〉和〈對比並行〉四種語意類型，而且不同的 *Te*-形子句之間呈現不同程度的獨立性。

關鍵詞：*Te*-形子句、非限定子句、副詞子句、補語子句

日本語「テ形節」の再々考

湯廷池

輔仁大学外国語学部
講座教授

佐伯真代

致理技術学院応用日本語学科
専任講師

要 旨

本文では、**テ形節**(*Te*-clause)においてもっとも中核的な動詞を述語にとる**テ形動詞節**(*V-Te* clause)のほかに、形容詞を述語にとる**クテ形形容詞節**(*A-kute* clause)、**形容名詞**(adjective noun= AN)を述語にとる**デ形形容名詞節**(*AN-de* clause)、名詞を述語にとる**デ形名詞節**(*N-de* clause)について、音韻形態及び統語構造と意味機能の関係を検討した。

テ形節の統語構造については、その内部の構成素から見て、主要部が**不定形**(non-finite)を含む**不定形節**(non-finite clause)であり、**定形節**(finite clause)である主文と共に起する従属節か補文としてしか機能せず、従属節として機能する場合には、副詞節として主文の述語を修飾し、また、補文として機能する場合には、アスペクト動詞などを**上位述語**(matrix predicate)にとると分析した。

さらには、副詞節としてのテ形節については、テ形節と主文との間との関係が＜並行的＞である([+並行])か、それとも＜並行的＞でない([−並行])か、両者が＜同一主語＞をとることを許す([+同一主語])か、それともそれを許さない([−同一主語])かの2つの素性と2つの値([+]と[−])を使って**交差分類**(cross-classification)を行った結果、＜同時並行＞・＜前後継起＞・＜因果継起＞・＜対比並行＞の4タイプに分類できることを提示し、これら異なる＜テ形節＞の間に異なる節としての＜独立度＞が見られることを指摘した。

キーワード：テ形節、不定形節、副詞節、補文

Another Reexamination on *Te*-clauses in Japanese

Tang, Ting-chi

Saeki, Mayo

Chair Professor,

Lecturer, Department of

College of Foreign Languages, Applied Japanese Language,

Fu-Jen Catholic University Chihlee Institute of Technology

Abstract

The present paper examines the relationship among “phonological representation,” “syntactic construction” and “semantic function” of various types of *Te*-clauses of predicates in Japanese, “V-*Te* clause” of verb, which functions as the core of predicates, “A-*kute* clause” of adjective, “AN-*de* clause” of adjective noun (=AN), and “N-*de* clause” of noun. And we have found that, syntactically, the main structure of the “*Te*-clause” is a non-finite clause and it functions only as either a complement clause or a subordinate clause co-occurring with the main clause; it modifies the predicate of the main clause when functioning as a subordinate clause, whereas it takes aspect verbs as its matrix predicate when functioning as a complement clause.

Moreover, we employ two features, “parallel” as well as “independent subject,” and two values, “+” as well as “–,” to conduct a “cross-classification” examination to identify if the relationship between the “*Te*-clause” and the “main clause” is “+parallel” or “–parallel” and if they may (“+independent subject”) or may not (“–independent subject”) take an “independent subject.” Based on the results of the examination, we propose that the “*Te*-clause” functioning as an “adverbial clause” can be classified into four types: “simultaneous parallel,” “sequential continuation,” “causal continuation,” and “contrast parallel.”

Key words: *Te*-clause, non-finite clause, adverbial clause, complement clause

日本語「テ形節」の再々考

湯廷池

佐伯真代

輔仁大学外国語学部

致理技術学院応用日本語学科

講座教授

専任講師

1. はじめに

本稿で取り上げる**テ形節**(*Te*-clause)とは、もともと中核的なく動詞>を述語にとる**テ形動詞節**(*V-Te*¹ clause)のほかに周辺のなく形容詞>を述語にとる**クテ形形容詞節**(*A-kute* clause)、**形容名詞／動詞**(*adjective noun=AN*)²を述語にとる**デ形形容名詞節**(*AN-de* clause)、**<名詞>**を述語にとる**デ形名詞節**(*N-de* clause)を含む。これら周辺のなく**テ形節**>は、中核的なく動詞**テ形節**>に比べると、**音韻形態**(*phonological form*)や**統語構造**(*syntactic structure*)において比較的簡単であり、**意味機能**(*semantic function*)や**意味解釈**(*semantic interpretation*)においても<テ形動詞節>よりも比較的制限を受けるが、両者の間の共通性も少なからず見受けられる。それで、これらすべての<テ形節>を議論の射程の中に入れることによって、<テ形節>の構造と機能の真相の解明がいつそう深まり、さらなる<一般化>が得られるのではないかとと思われる。

また、従来の先行文献では、<テ形節>の<意味解釈>に重点がおかれ、その<多様性>に焦点が向けられた結果、単なる<テ形節>の意味・用法のリストアップに終わり、これら多様な意味・用法がどんな要素と関連し合い、どのような条件によってもたらされたものであるかの詮索がおろそかにされてしまった、という傾向が

¹ この‘Te’はいくつかの<音声形式>が異なる「テ形動詞」の**異形態**(*variant*)を含む**形態音素**(*morphophoneme*)を指す。

² <形容名詞>とは、伝統的な国語学で<形容動詞>と呼ばれてきたもので、学者の中には**名詞的形容詞**(*nominal adjective*)と呼ぶ人たちさえもいる。<形容動詞>を<形容名詞>と呼び換える理由については、湯(2002・2012)等を参照されたい。

見られると思われる。そこで、本稿はまず、＜テ形節＞の**基本的**(basic)・**中核的**(core)な意味・用法を挙げ、これらの基本・中核的な意味から(i)＜テ形節の主語＞と＜主文の主語＞が**同一指示**(coindexed; coreferential)であるかないか、(ii)＜テ形節＞と＜主文＞の間に置き換えが許されるどうか、(iii)＜述語＞としてはどういう**統語範疇**(syntactic category; すなわち述語動詞・形容詞・形容名詞の下位範疇(subcategory)や**語彙アスペクト**(lexical aspect)などに関する分類)が使われているのか、また、(iv)**現実世界に関する知識**(the real world knowledge; すなわち**語用知識**(pragmatic knowledge))が関与しているのかどうか、(v)これらの異なる意味・用法は、日本語でどのような**言い換え**(paraphrase)ができるのかなどの視点から、＜テ形節＞の＜意味解釈＞の問題を追及する。

次に、＜テ形節＞の＜統語構造＞については生成文法の観点から考察し、＜テ形節＞は**定形節**(finite clause)であるのか、それとも**不定形節**(non-finite clause)であるのかの議論から始まり、＜テ形節＞は＜主文＞とは異なり、一般に単独で文を構築することはできないという明白な事実から、＜テ形節＞は＜主文＞と共に**副詞節**(adverbial clause)か**補文**(complement clause)としてしか機能しない、という分析を提示する。＜副詞節＞として機能する場合には、**付加詞**(adjunct)として主文の述語を修飾し、また、＜補文＞として機能する場合には、**必須項**(obligatory argument)として機能し、**アスペクト動詞**(aspectual verb)などを**上位述語**(matrix predicate)にとると結論づける。さらに、＜主文述語＞が＜ル形＞や＜タ形＞などの**終止形**(すなわち、**定形**(finite form))をとることができるのに対し、＜テ形述語＞は＜テ形＞という**不定形**(non-finite form)をとり、その＜時制解釈＞も、＜主文＞の＜時制解釈＞に基づいて＜相対時制＞の解釈を受けることから、＜テ形節＞は基本的に＜不定形節＞である、と位置づける。なお、＜主文＞は、その**構成素**(constituent)がなんらの制限も受けないのに対し、＜テ形節＞の＜構成素＞の中には、＜終／文末助詞＞・＜感動詞＞・＜応答詞＞・＜認知・対事のモダリティ

イ表現>・<発話・対人のモダリティ表現>から、<アスペクト>や<時制>の表現までもが含まれないことを指摘する。

本稿の構成は大体次のようである。まず、第1節の「はじめに」で、本稿の目的・方法と主なる内容について述べる。次いで、第2節の「テ形節の音韻形態」で、<テ形動詞>の<音韻変化>・<テ形形容詞>の<音声形態>・<形容名詞>と<名詞>の<テ形節>における<表現形式>などについて記述する。第3節の「<テ形節>の統語構造」では、<テ形節>は<不定形節>であることをその<構成素>から検証し、第4節の「<副詞節>の<階層構造>と<テ形節>」では、副詞節用法の<テ形節>を<副詞節>の<階層構造>との関連から捉えようとする見方の問題点について論じる。第5節の「<テ形節>の副詞節用法の<統語構造>と<意味機能>の関係」では、<副詞節>として機能する<テ形節>の<意味解釈>を基本的に<継起>と<並行>の2種類に大別し、さらに<同一主語>を要求するか否かという観点から、<同時並行>・<前後継起>・<因果継起>・<対比並行>に4分類する。最後に、第6節の「むすび」では結論と将来の研究課題を述べる。

2. <テ形節>の音韻形態

<テ形節>の述語の中で、<音韻形態>がもっとも複雑なのは、<テ形動詞>³である。日本語の動詞は、その原形(root form)や語幹(stem)の<語尾>がローマ字の母音の‘i’と‘e’で表される母音動詞(vocalic verb)と<動詞接辞>の語尾が9つの子音‘m, n, b, t, r, w, s, k, g’の中の一つで終わる子音動詞(consonantal verb)、そして、ごく少数の不規則動詞(irregular verb; 例えば、「する・行く・来る・だ」などの3種類に分けることができる。その中で、<母音動詞>は、直接「テ」をとって、「起きる>起きて・食べる>食べて」のように、

³ 「テ形動詞」(V-*Te*)とは、伝統的な国語学の中で、動詞の<連用形>や<第1中止(なかどめ)形>(V-(i))と対応して、<第2中止(なかどめ)形>と呼ばれてきたものである。

＜テ形動詞＞になるのに対し、‘m, n⁴, b’ などの子音で終わる動詞は、これらの子音が＜撥音＞の [N] に転化した後、「ンデ」の形をとって、「沈む＞沈んで・死ぬ＞死んで・遊ぶ＞遊んで」（いわゆる＜撥音便＞）のように＜テ形動詞＞になり、‘t, r, w’ などの子音で終わる動詞は、これらの子音が＜促音＞の [Q] に転化した後、「ッテ」の形をとって、「勝つ＞勝って・打つ＞打って・買う⁵＞買って」（いわゆる＜促音便＞）のように、＜テ形動詞＞になり、また、‘s, k, g’ などの子音で終わる動詞には、母音の ‘i’ が挿入されて、それぞれが「指す＞指して・書く＞書いて・急ぐ＞急いで⁶」（いわゆる＜イ音便＞）のように＜テ形動詞＞になる。また、＜漢語由来の動詞＞は、＜動詞語幹＞が、「察(さつ)・失(しつ)・屈(くつ)・達(たつ)」などのように「つ」の音で終わるものは、「察(さつ)する・失(しつ)する・屈(くつ)する・達(たつ)する」などのように、まず「つ」音が＜促音化＞されて「っ」音になった後に、**虚辞動詞(dummy verb)**⁷ の「する」を伴って、「{察(さつ)/失(しつ)/屈(くつ)/達(たつ)して}」のようにイ音便の＜テ形動詞＞になる。また、「信(しん)・案(あん)・感(かん)・嘆(たん)」などのように、＜撥音＞の「ん」で終わったり、「長(ちょう)・供(きょう)・応(おう)・興(きょう)・映(えい)」な

⁴ ほかに子音で終わる＜子音動詞＞の語例が数多くあるのに対し、‘n’ 音で終わる語例は「死ぬ」の1つしかなく、古語までさかのぼっても、「死ぬ」と「往(い)ぬ」の2つしかない。これは、これら動詞の「ヌ」音が＜完了＞・＜打消し＞や＜強調＞(例えば、＜百人一首＞の45番の謙徳公の歌「...身のいたずらになりぬべきかな」を表す「ぬ」音からの **ブロッキング・イフェクト/阻害現象 (blocking effect)**を受けた結果、生じたものではないかと思われる。

⁵ 「買う」の原形が ‘kaw’ であることは、その＜否定形＞が「買わない」(kaw^uanai)であることから支持される。

⁶ ‘k’ で終わる＜子音動詞＞が「書く＞書いて」のように、＜清音＞の「テ」になり、‘g’ で終わる＜子音動詞＞が、「急ぐ＞急いで」のように＜濁音＞の「デ」になるのは、それぞれ＜清音＞の ‘k’ と＜濁音＞の ‘g’ からの同化作用 (assimilation) による結果生じたものと思われる。

⁷ ＜虚辞動詞＞は、**軽動詞(light verb)**や**形式動詞(formal verb)**とも呼ばれ、伝統的な＜サ変動詞＞に相当するものである。

どのように＜引き音＞の「ー」で終わったりするものは、＜虚辞動詞＞「する」の＜異形態＞である「{ず／じ}る」をとって、「{信(しん)・案(あん)・感(かん)・嘆(たん)・長(ちょう)・供(きょう)・応(おう)・興(きょう)・映(えい)}{ず／じ}る」のように＜濁音化＞や＜イ音便＞を経て、＜テ形動詞＞になる。その他の場合には、「死／期待する」のように何らの＜音便変化＞も伴わずに＜動詞化＞し、＜イ音便＞を経て＜テ形動詞＞になる。さらに、漢語以外の外来語の場合には、すべてが＜虚辞動詞＞の「する」をとって「キスする、ダンスする」のように＜動詞化＞・＜イ音便＞を経て、「{キス／ダンス}して」のように＜テ形動詞＞になる。

しかし、＜外来語動詞＞の‘demonstrate, sabotage, agitate, trouble’は＜縮約＞されて「デモる、サボる、アジる、トラブる」になり、＜漢語動詞＞の「告白する」が「コクる」のように＜日本語動詞化＞すると、すべてが子音の‘r’で終わる＜子音動詞＞と解釈され、＜促音便＞を経て＜テ形動詞＞の「{デモ／サボ／アジ／コク}って」になる。これらの語例を挙げると、次のようになる。

- (1) a. 船はゆっくりと海の底に沈んでいった。 (撥音便)
- b. 医者が駆けつけてきたとき、彼はすでに死んでいた。 (同上)
- c. 子供たちが公園で楽しそうに遊んでいた。 (同上)
- d. そんな弱い相手に勝って当たり前だよ。 (促音便)
- e. あっ、雨が降ってきた。 (同上)
- f. ちょっと煙草を買ってきてくれないか。 (同上)
- g. 時計の針はかっさり 6 時 10 分を指していた。 (イ音便)
- h. 私は宛先を書いてポストの中に入れた。 (同上)
- i. そんなに急いでどこに行くの。 (同上)
- j. まだ目標には達していない。 (漢語動詞)
- k. 私は彼の為人を信じている。 (同上)
- l. 貧乏な少年は長じて実業家になり、巨万の富を擁した。 (同上)

- m. 豹は死して皮を残し、人は死して名を残す。 (同上)
- n. 二人は仲良くキッスして別れた。 (外来語)
- o. 私たちはダンスして楽しんだ。 (同上)
- p. 私は授業をサボって両親に叱られた。(外来語縮約動詞)
- q. 次郎が由美子にコクって、二人はつきあい始めた。
(漢語縮約動詞)

一方、＜形容詞＞は、＜ク形容詞＞と＜シク形容詞＞とに関わらず、すべての＜形容詞＞⁸ が「A く・A くて」のように、＜ク(テ)形＞をとって＜ク(テ)形節＞になる。また、＜形容名詞＞(以前＜形容動詞＞と呼ばれたもの)も、それが漢語か外来語かを問わず、＜ナリ形容詞＞か＜タリ形容詞＞かも問わず、すべて＜形容名詞＞(AN)が「AN で」のように、＜デ形＞をとって＜デ形節＞になる。さらに、＜名詞＞(N)も、＜形容名詞＞と同じように、**連結動詞**(copulative verb)あるいは**判断動詞**(judgement verb)の「だ」の＜連用形＞である「デ」をとって、＜デ形節＞になる。このほかに、**オノマトペ**(onomatopée)も、＜形容名詞＞や＜名詞＞のように、「デ」をとって、「デ形節」になる。これらの語例を挙げると、次のようになる。

- (2) a. ラーメンは旨くて、安い。 (ク形容詞)
- b. 妻は優しくて、温和しい。 (シク形容詞)
- c. この部屋は静かで、落ちつく。 (和語形容名詞)
- d. この景色は、奇麗で、素敵だ。 (漢語形容名詞)
- e. 彼はスマートで、チャーミングだ。 (外来語形容名詞)

⁸ 日本語の＜形容詞＞は、＜動詞＞とは異なり、＜不規則形容詞＞なるものは、存在しない。しかし、例外的に、「同じ」はその＜終止形＞が一般の形容詞のように「イ」音で終わらず、述語として使われた場合にも＜形容名詞＞と同じく、＜連結動詞＞の「だ・です・である・であります」を伴って現われる。その一方、＜連用形＞の場合には、「同じく」と一般の＜形容詞＞と同じように使われる。このほか、「同じくて」のように＜クテ形＞が使われることは少なく、＜程度副詞＞の「とても・かなり・すこぶる・非常に」などの修飾を受けることもできず、＜比較構文＞の「甲は乙より A(い／だ)」にも現れることができないなど、かなり異色の形容詞といえる。

f. あいつはグズで、野呂馬だ。

(オノマトペ)

3. <テ形節>の統語構造

<テ形節>は、その名が示すように、**節**(clause)であり、**句**(phrase)や**文**(sentence)ではない。例えば、動詞の<テ形節>では、述語動詞が<テ形>をとるのに対し、**独立文**(independent sentence)の述語動詞は、「ル形」や「タ形」をとる。日本語の**定形動詞**(finite verb)⁹は、<ル形>と<タ形>がそれぞれ**未然**(irrealis；すなわち**非過去時**(non-pasttime)¹⁰に起こる事象と**已然**(realis；すなわち**過去時**(past time)に起こった事象)を指して、**絶対時制**(absolute tense)を表すのに対し、<テ形>自身は特定の時間を指さず、<時制的>にも<主文の時制>に従って**相対時制**(relative tense)を表すので、<定形動詞>ではなく、**不定形動詞**(non-finite verb)と解釈すべきであろう。<テ形節>が単独で起こることができるのは、「早く{来て／助けて}！」のように、助けなどを求める場合に限られ、これは<テ形節>の後ろに起こる「ちょうだい」や「くれ」が省略された形であると分析することができよう。また、伝統的文法では、<テ形>を**接続助詞**(conjunctive particle)と分析するものが多いが、<テ形動詞>の後ろには、「ハ・モ・コソ・サエ」などの<係助詞>や「マデ・バカリ・デモ」などの<副助詞>や「カラ」などの<後置詞>(伝統的な国語学では<格助詞>と呼ばれる)が後接することができる上に、<テ形>の<音便変化>は、<タ形>の<音便変化>と完全に同じ内容なので、これらの「テ」を<異形態>を持つ<接続助詞>と分析す

⁹ **定形**(finite form)をとる動詞は、その形式で<文>を終えることができるので、<終止形>と呼んでもよかろう。しかし、この場合の<終止形>は、伝統的な古語文法や国語学で使われる<終止形>とは、異なる意味で用いられていることに注意されたい。<非過去時>は、ふつう**総称時制**(generic tense)と呼ばれるが、仏教用語の<一切時>や<過現末>を使って<総称時制>を表してもよかろう。また、本稿は**時間**(time)と**時制**(tense)を区別する立場をとる。

¹⁰ このほかに、<仮定条件>を表す<タラ形>や<例示>を表す<タリ形>も同じような<音便変化>を起こす。

るよりも、動詞の活用形(conjugation)の1つとして解釈するほうが、自然であり、妥当ではないか、と思われる。伝統的な国語学の中でも、＜連用形＞(あるいは＜第1中止形＞と呼ぶこともある)の＜シ形＞と呼ぶこともある)の＜シ形＞と平行して＜テ形＞を＜第2中止形＞と呼ぶ学者がいるので、このような主張は道理にかなったものである、といえる。

＜テ形節＞は＜節＞ではあるが、＜従属節＞や＜補文＞として、文の中に現われるので、その＜節＞の中に起こる構成素(constituent)は＜文＞の中に起こるそれよりも、はるかに厳しい制限を受ける。＜文＞の中では、命題(preposition)やモダリティ(modality)に属するすべての＜構成素＞が起こることができるのに対し、＜節＞の中では原則的に＜命題＞に属する＜構成素＞のみが起こることができ、＜モダリティ＞に属する＜構成素＞は、起こることができない¹¹。まず、発話・対人のモダリティ(speech-act modality)に属する終助詞(final particle; ＜文末助詞＞とも呼ばれる)の「カ」(疑問・反語・感動)・「ナ」(禁止・感動)・「ナ(ア)」(感動・相手に念を押す)・「ヤ」(誘いかけ・呼びかけ)・「ゾ／ゼ」(強調・念を押す(主に男性用語))・「トモ」(強調・請け合う(主に男性用語))・「ヨ」(呼びかけ・感動・強意)・「ワ」(軽い主張・感動(主に女性用語))・「ノ」(軽い断定(平常体・丁寧体動詞の後ろに起こることができる)・疑問(平常体動詞の後ろにしか起こらない)・「ね(え)」(念を押し強める・感動)・「サ」(強調(主に男性用語))・「コト」(感動・疑問(主に女性用語))や(補)助動詞(auxiliary verb; あるいは＜主文＞の上位述語(matrix predicate))の＜命令＞を表す「V-e」(子音動詞の平常体)・「V-{y/r}o」(母音動詞の平常体)と「V-(i)なさい」(丁寧体)・＜勧誘＞を表す「V-kō」(子音動詞の平常体)・「V-yō」(母音動詞の平常体)・「V-(e)ましょう」(丁寧体)・＜当為＞を表わす「ベ

¹¹ 日本語の＜文＞や＜節＞に起こる＜命題要素＞や＜モダリティ要素＞の内容については、湯(2012c)を参照されたい。

き{だ／です}」などは、＜主文＞の中に起こることはできるが、＜テ形節＞の中に起こることはできない。また、**命題(めあて)・対事(めあて)のモダリティ**(propositional modality)の「たぶん・恐らく・必ず・きっと」(副詞用法)や「らしい・はず・そうだ・かも(しれない)・かしら(ない)・だろう・でしょう」(助動詞用法)も、＜主文＞の中にのみ起こり、＜テ形節＞の中には起こらない。

次に、＜命題＞に属する要素の中でも、**否定(negation)**を表す要素は、＜テ形節＞の中には現われにくい。次の例文を参照・比較されたい。

- (3) a. 君は行かなくて [?](も)よい。
b. 君は行かなくて *(は)いけない。
c. 朝、起きられなくて、寝坊した。
d. *帽子をかぶらなくて、散歩した。
e. 次郎が行かないで智子が行った。

(3a)と(3b)の例文は、一見＜ク(テ)形形容詞節＞かのように見えるが、＜主文述語＞は、＜ク(テ)形節＞が表す事象を＜評価＞する「よい・よろしい・かまわない・いけない・だめだ」などの形容詞・形容名詞に限られ¹²、＜係助詞＞の「モ」や「ハ」などを省略すると、文の座りが悪くなる。また、主文と＜テ形節＞が因果関係を表わす(3c)の例文では「ない」の＜ク(テ)形＞を用いることができるが、(3d)の＜様態＞を表わす用法では、用いることができない。(3e)の例文は、「行かない」のように、否定を表わす形容詞の「ない」の＜終止形＞が使われているので、＜テ形節＞とは異なるものだと考えられる。ちなみに、古語では＜肯定＞を表す＜テ形節＞のほかに、＜否定＞を表す＜デ形節＞が存在する。例えば、『小倉百人一首』の19番、25番の和歌を次に挙げる。

- (4) a. 難波潟 短き葦の ふしの間も 逢はで(=逢わないで)こ
の世を 過ぐしてよとや (伊勢)

¹² これらの形容詞は、**評価形容詞**(evaluative adjective)と呼ばれる。

- b. 名にし負ば 逢坂山のさねかづら 人に知られで(=知ら
れずにくるよしもがな (三条右大臣)

また、ボイス(voice)に属する要素は、**能動態(active voice)・受動態／受け身(passive voice ; 直接受動(direct voice)と間接受動(indirect voice)を含む)、使役態(causative voice)・使役受動態(causative-passive voice)**などすべて<テ形節>の中に含むことができる。

- (5) a. 太郎は [後ろから次郎を押し倒して] 逃げた。(能動態)
b. 花子は [先生に叱られて] 泣き出した。(直接受動)
c. 私は [赤ん坊に泣かれて] 一晩中眠れなかった。
(間接受動)
d. 夫を [兵役に行かせて]、妻は留守を守った。(使役)
e. 正男は授業中に [黒板の前に立たせられて] 泣きべそ
をかいた。(使役受動)

しかし、**アスペクト／相(aspect)**に属する要素は、<実現状態相>¹³の「いる」・<実現存続相>の「おく」・<向遠相>の「いく」・<向近相>の「くる」・<試行相>の「みる」・<試示相>¹⁴の「みせる」・<授恵>の「やる」・<受惠>の「くれる・もらう」など、すべて<テ形節>に<後接>し、<テ形動詞>に<先行>するものは、アスペクトに関する要素では、**フェーズ／局面(phase)**を表す「始め(る)・続け(る)・終え(る)」や<過剰>を表わす「過ぎ(る)」などだけである。下に掲げる例文を参照されたい。

- (6) a. 太郎は [もう宿題を書き始めて] いる。
b. 太郎は [半時間前から新聞を読み続けて] いる。
c. 花子は [家事をし終えて] (から) 外出した。
d. 彼は [西瓜を食べ過ぎて] お腹をくだした。

さらに、**動詞句副詞(VP-adverb)**に属する<時間副詞>・<場所副詞>・<相方副詞>・<道具・手段副詞>・<原因・理由副詞>や

¹³ これらの<相>に関する名称は、加藤など(1989:139)による。

¹⁴ 加藤など(1989:139)では、<試行>の「てみる」と<試示>の「てみせる」を<派生的動詞>と分析している。

<様態副詞>などは、<テ形節>の中に起こることができる。次の例文を参照されたい。

- (7) a. 太郎は[今朝 早く 起きて]公園で散歩をした。
(時間・様態)
- b. 彼は[[夕方 レストランで 友人と 食事をして]夜 居酒屋
で徹夜して]麻雀をした。(時間・場所・相方)
- c. 私は平常[友人と e-mail で 株に関する情報を交換し合っ
て]いる。(相方・手段)
- d. 淑子は毎日[ひとりで 真面目に 勉強をして]いる。
(様態・様態)

ただ、これらの<動詞句>は、<主文>と<従属節>あるいは<補文>の両方ともとることができるので、果たしてどちらの<動詞句>を修飾しているのかの判断が曖昧になることがある。例えば、例文(7a)の時間副詞の「今朝」は、<従属節の動詞>の「早く起きて」を修飾しているのではなく、<主文の動詞句>を含む「早く起きて公園を散歩した」を修飾していると解釈することもできる。

- (8) 太郎は[今朝[早く起きて]公園で散歩をした]。

また、主文の述語動詞が<総称時制>や<一切時>を表す場合、<時間副詞>(例えば、「毎日」)は、主文の<総称時制>の「ル形」と呼応すると思われるので、<主文の動詞句>を修飾するものと解釈してよかろう。

- (9) 太郎は[毎日[朝早く起きて[公園を 散歩して]]いる]。

最後に、<テ形節>は、述語動詞の<目的語>(<直接目的語>と<間接目的語>を含む)や<補文>を伴って現われることができる。

- (10) a. 太郎は [父親に <間接目的語> プラモデルを <直接目的語>を
買って] もらった。
- b. 彼は [妻に <間接目的語> ちょっと出かけると <補文> 言っ
て] 外に出ていった。

では、<主語>も<テ形節>の中に起こるのであろうか。<因果

継起>と<対比並行>を表す用法では、次の例文のように<主文>と<テ形節>がそれぞれ異なる主語を持つことができる。

(11) a. [両親は弟が東大の試験に合格して]とても喜んでいる]。
(因果用法)

b. [[姉はフランス語が話せて]妹はドイツ語が話せる]。
(対比用法)

同じように、<主文>と<テ形節>が同じ主語を持つ<前後継起>と<同時並行>の用法でも、<テ形節>の中に、次の例文のように<主文>の主語と同一指示(co-index)¹⁵の空の代名詞({null/empty/zero} pronoun)に属するビッグ・プロ(big PRO)を主語として想定することができる。

(12) a. [太郎_iは[PRO_i (*が) 戸を開けて]外へ出て行った]。
(前後継起用法)

b. [太郎_iは[PRO_i (*の)¹⁶ 口を開けて]眠っていた]。
(同時並行用法)

このように、<不定形節>の主語に<音声形式>を持たない<空(の)代名詞>を想定することは、生成文法(generative grammar)では、ごく自然でかつ必要な分析である。というのは、<生成文法>では、セータ基準(theta-criterion)によって、述語動詞の必須項(obligatory argument)は、すべての表示レベル(levels of presentation;すなわち深層構造(D-structure)、表層構造(S-structure)、音声形式(phonetic form(=PF))¹⁷、論理形式(logical form=LF)において、具現されていなければならない、また<不定形節>の屈折辞(inflexion (=Infl))は、一致要素(agreement morpheme (=AGR))を含まないので、音形を持つ名詞句(overt NP)を認可(license)することができず、その結果、

¹⁵ <同一指示>は、当該の<名詞句／限定詞句>や<空の代名詞>にアルファベットの付く小文字(subscript)の‘i, j’などをつけて表記される。

¹⁶ <空の代名詞>は、<音声形式>を持たないので、格助詞(case particle)の「が」や「の」を付け加えて発音することはできない。

¹⁷ <音声形式>では、特定の要素が削除還元の可能性(recoverability of deletion)を満たすことによって、その<削除>が許されることがある。

＜空代名詞＞¹⁸の「**PRO**」が＜不定形節＞の主語となるわけである。そして、このような分析は、英語の＜不定形節＞だけではなく、日本語の＜不定形節＞にも当てはまるものと思われる。しかし、英語と日本語の間には、経験的事実において1つ異なる点がある。それは、英語の＜定形節＞の主語は、＜音形を持つ名詞句＞ではなくてはならない、という**拡大投射原理**(Extended Projection Principle=EPP)の制約を受けて、＜定形節＞は音形を持たない**空主語**(null subject)をとることができない¹⁹のに対し、日本語はそのような制約を受けず、＜空の代名詞＞を＜主語＞(そして、時には＜目的語＞)にとることができる。このような＜定形節＞に起こる＜空代名詞＞は、＜不定形節＞に起こる＜ビッグ・プロ＞(**PRO**)と区別して、**スモール・プロ**(small *pro*)と呼ばれ、＜小文字＞の‘*pro*’と表記されることが多い。例えば、次の＜対話文＞では、＜応答文＞として＜空の代名詞＞が使われ、＜音形を持つ代名詞＞を使うと不自然に響く。

- (13) a. 太郎_iは 昨日 次郎_jに会ったの？
 b. pro_i(*は) pro_j(*に) 会ったよ。
 c. ?*彼_iは 彼_jに 会ったよ。

本稿では、このような2つの＜空の代名詞＞の‘**PRO**’と‘*pro*’を統合して、‘**Pro**’と表記することにする。このような表記法に基づく、(12)の例文は、(14)のように表記されることになる。

- (14) a. [太郎_i {は／が}] [Pro_i (*が) 戸を開けて] 外へ出て行った。

¹⁸ ＜空の代名詞＞は、当初 **PRO 定理**(PRO theorem)で処理されていたが、その後、**空(の)格**(null Case)を持つ、と分析されるようになった。

¹⁹ この結果、英語では、‘seem, appear, (so) happen, likely, unlikely’などの**命題**(proposition; ＜定形節＞と＜不定形節＞を含む)を＜内項補文＞にとり、**空の節点**(empty node)を＜外項主語＞とする**繰り上げ動詞**や**形容詞**(raising verb / adjective)が存在し、＜補文＞が＜定形節＞の場合には、＜主文主語＞として**虚辞**(expletive/pleonastic)の‘it’が使われ、＜補文＞が＜不定形＞の場合には、＜不定形節＞の主語が＜主文＞の＜主語＞の位置に繰り上げられて主語になるが、日本語にはこのような＜虚辞＞は存在しない。また、**繰り上げ構文**(raising construction)の存在可能性については、稿を改めて考えることにする。

b. [次郎]_i {は／が} [Pro_i (*の) 口を開けて] 眠っていた。

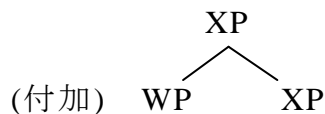
このように、＜テ形節＞は＜主文＞と同じく、**屈折辞句**(Inflectional phrase = (IP))に属するが、＜主文＞が＜定形節＞であるのに対し、＜テ形節＞は＜不定形節＞である。＜定形節＞と＜不定形節＞を区別するために、＜定形節＞の＜屈折辞句＞の**主要部**(head)である＜屈折辞＞(Infl)が**定形**(finite ; すなわち‘Infl<+finite>’)という**形式素性**(formal feature)を含むのに対し、＜不定形節＞・＜屈折辞句＞の＜主要部＞は**不定形**(non-finite ; すなわち‘Infl<-finite>’)を含む、と分析することにする。また、＜テ形節＞は、例文(14)のように、＜主文の主語＞の前に現われることもあれば、その後ろに現われることもある。＜テ形節＞(IP)が＜主文＞の前に現れる場合には、＜主文＞(IP)に**付加された**²⁰ **adjoined to**)ものと分析し、＜テ形節＞(IP₂)が＜主文＞に現われる場合には、＜主文動詞句＞(VP₁)に＜付加＞されたものと分析する。

(15) a. [IP₁ [IP₂ Pro_i (*が) [VP₂ 戸を開けて]] [IP₂ 太郎_i が [VP₂ 外へ出ていった]]]。

b. [IP₁ 太郎_i が [VP₁ [IP₂ Pro_i (*が) [VP₂ 戸を開けて]]] [VP₁ 外へ出ていった]]。

＜従属節／副詞節用法＞として機能する＜テ形節＞の＜統語構造＞は、(15)のように分析することができるが、＜補文用法＞として機能する＜テ形節＞の＜統語構造＞は、どのように分析されるべきであろうか。＜補文用法＞の＜テ形節＞の＜統語構造＞の分析に関しては、少なくとも**主文述語** (matrix predicate) を **1 項述語**

²⁰ ある**節点**(node ; 例えば、‘IP’ や ‘VP’)に＜テ形節＞を＜付加＞するとは、その＜節点＞の上に、元来の＜節点＞と同じ＜節点＞を生成し、この新しく生成された＜節点＞の**支配**(dominance)の元に、＜テ形節＞が元来の＜節点＞の**姉妹節点**(sister node)となることである。このようなく付加＞は、次のように図示することができる。



(one-place predicate)とみなすのか、それとも2項述語(two-place predicate)とみなすのかによって、(15a,b)のような2つの選択肢が考えられる(‘DP’は決定辞句／限定詞句(Determiner Phrase(=DP))を表す)。

(16) a.[_{IP1} [_{IP2} DP ...テ] イル]

b.[_{IP1} DP_i [_{IP2} Pro_i ...テ] イル]

この2つの選択肢のうち、どちらを選択すべきかについては、紙幅の都合上、稿を改めて議論する。

上述のように、日本語の<テ形節>には<副詞節>として使われる場合と、<補文>として使われる場合の2つの用法に分けることができる。<副詞節用法>も、<補文用法>も、ともに<従属節>であり、<主文>のように独立して起こることはできず、その<時制解釈>も、<主文の時制>にしたがって<相対時制>として解釈される。また、<テ形節>の中に含まれることができる<構成素>の種類は、<主文>の中に含まれる<構成素>よりも厳しい制限を受ける。例えば、<終助詞>・<命題(めあて)>・<対事のモダリティ表現²¹>・<発話伝達・対人のモダリティ表現²²>や<アスペクト表現²³>などは、<従属節>に属する<テ形節>の中には現れない。さらに、<時間>や<場所>などを表す<動詞句副詞>は、<独立度>が比較的高い<テ形節>の用法の中には起こることができるが、<独立度>が低い<テ形節>の用法では、<主文>の中に起こって、<テ形節>をも含む<主文述語>を修飾するものと解釈されるものが多いので、注意を要するが、その具体的な内容については、異なる<意味機能>を持つ<テ形節>の<副詞節用法>の中で、説明していくことにする。

²¹ <副詞(句)>や<動詞>などを含む。

²² <終／文末助詞>や<動詞>などを含む。

²³ <アスペクト表現>は<主文>の上位述語(matrix predicate)として分析することができるものがある。

4. <副詞節>の<階層構造>と<テ形節>

<テ形節>の<副詞節用法>に関する最近の先行文献を見ると、松尾(2010)のように、その<意味内容>や<意味機能>の多様性に着目し、これらの異なる<意味内容>を<述語>や<副詞節>の**階層構造(hierarchical structure)**の視点から捉えようとするものが多く見られるが²⁴、これらの<意味内容や機能>を<中核的なもの>から<拡張的なもの>へと分類・整理し、それぞれの<意味内容や機能>は、具体的にどのような基準に基づいて特定されるのかを明確に論じたものは少ないように思われる。

<テ形節>の異なる<統語構造>や<意味機能>を <テ形節>が相関する述語や副詞節の階層に求める試みは、南 (1964・1974・1993) や 野田 (1989・1995) までに遡ることができる²⁵。例えば、南(1964・1974・1993) は、日本語の<従属節>²⁶をその<内部構造>に現われる<構成素の種類と範囲>によって、大きく「A・B・C」の<3階層>に分けた上で、<従属節相互の包含可能性>と<従属節と主文構成素との共起関係>に基づいて、「A・B・C・D」の<4階層>²⁷に区分している。これによると、<付帯状況>を表す<テ形節>は、「A類」の「～テ₁」に、<前後・継起>を表す<テ形節>は、「B類」の「～テ₂」に、<原因理由>を表わす<テ形節>は「C類」の「～テ₃」に属し、そして「D類」の<並立・前提>を表わす<テ形節>は、「D類」の「～テ₄」に属することにな

²⁴ 松尾(2010)については湯・佐伯(2011a,b)でその分析の問題点を指摘したので参照されたい。

²⁵ 松尾(2010:8)は、Cinque (1999)の<機能範疇の普遍的な階層>との関係に触れているが、(15)に掲げられた7つの<テ形節>が具体的に Cinque (1999)の28種類にもわたる<機能範疇>のいずれに属するのかについては、何らの言及もない。

²⁶ 原文では、<従属句>という用語が使われているが、<テ形節>はその名の如く、句(phrase)というよりも節(clause)と解すべきであろう。

²⁷ 南(1993:22)によると、<階層>が“文または各類の句 [すなわち、<節>] の構造をいわば固定的な対象として認められるものを指す”のに対し、<段階>は、“文または各種の句 [すなわち、<節>] を表現・理解する過程を前提とした場合に認められるものを指す”という。

る。また、「D 類」は「C 類」よりも、そして、「C 類」は「B 類」よりも、さらに「B 類」は「A 類」よりも＜文らしさの度合＞が高いので、＜文らしさの度合＞の高低の順序に従って、＜内部構成素の範囲＞は広くなる²⁸。

(17) a. 首を傾げて歩いている。 (付帯状況：「A 類」テ形節)

b. 戸をパタンと閉めて、出て行った。

(前後継起：「B 類」テ形節)

c. 風邪を引いて、休んだ。 (原因理由：「C 類」テ形節)

d. A 社はたぶん今秋新製品を発表する予定でありまして、

B 社もなんらかの対策をとるものと思われます。

(並列前提：「D 類」テ形節)

しかし、尾上(1997a, b)が指摘するように、いわゆる＜従属句相互の包含可能性＞と＜従属句と主文構成素との共起関係＞の 2 つの基準の間には、矛盾が起こることがあり、そのために、同じ＜従属節＞が同時に 2 つの異なる＜段階＞に属するようなケースが見られることがある。また、＜テ形節＞の異なる＜意味機能＞や＜統語表現＞は、必ずしも＜従属節＞の＜階層＞や＜段階＞に根拠を求める必要はなく、もっと簡単に明瞭な解決方を提示することができる。例えば、例文(17b)の＜並列前提用法＞は、＜テ形節＞が＜主文＞と＜非同一主語＞を取ることを許容し、＜述語動詞＞として**判断動詞／コピューラ**(copula (tiveverb))の「です・である」をとると定義づけることによって、＜文らしさの度合＞が高まり、「たぶん」のようなく対事のモダリティ副詞＞の修飾を受け、かつ述語動詞が＜丁寧形＞を取ることが許される、と説明することができる。次の例文を参照・比較されたい。

(18) a. A 社はたぶん今秋新製品を発表する予定で、B 社もなんらかの対策をとるものと思われる。

b. A 社はたぶん今秋新製品を発表する予定でして、B 社も

²⁸ 以下の例文は、南(1993)から。しかし、例文の後ろの＜丸括弧＞内に含まれた注釈は本稿の作者によるものである。

なんらかの対策をとるものと思われます。

- c. A 社はたぶん今秋新製品を発表する予定であり、B 社も
なんらかの対策をとるものと思われる。

すなわち、このように＜主文＞と＜異なる主語＞を許し、述語に＜判断動詞＞を使う＜並列用法＞は、＜文型＞において、**複文**(complex sentence)と**重文**(compound sentence)の中間に存在するもので、その他の用法の＜テ形節＞に比べて＜文らしさの度合＞がより高く、それゆえに＜対事のモダリティ副詞＞を取ることができ、述語動詞は＜平常体＞にも＜丁寧体＞にもなることができる、と説明するわけである。このような説明は、この＜文型＞が常に＜D 類＞の段階に属するというようなく分類的な分析よりも、日本語教室の現場において、学生にとってより分かりやすいものである、と思われる。そして、このような**説明的妥当性**(explanatory adequacy)を備えた分析を得るためには、ただ述語の＜副詞節の階層＞の帰属先を追求するだけではなく、＜テ形節＞と＜主文＞の間で**同一主語**(identical subject)を許すと同時に、**非同一主語**(non-identical subject)も許すかどうか、＜テ形節＞と＜主文＞の述語動詞の**語彙アスペクト**(lexical aspect)や**項構造**(argument structure)などの**類型**(type)や**組み合わせ**(combination)はどんなものであるか、＜テ形節＞と＜主文＞の内容を入れ換えても＜文＞の**認知的な意味**(cognitive meaning)は変わらないかどうかなどの問題を検証して、その中から**言語学的に有意義な一般化**(linguistically significant generalization)を引き出すことが必要であろう。また、＜テ形節＞の＜意味内容＞や＜意味解釈＞も、単に**言語的直感**(linguistic intuition)に基づくのではなく、どのように**言い替え**(paraphrase)が許されるのかという具体的なテストによって特定すべきではなかろうか、と思われる。

5. ＜副詞節用法のテ形節＞の＜統語構造＞と＜意味機能＞の関係

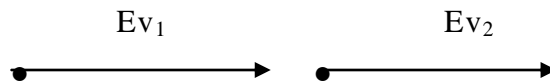
まず、すべての＜テ形節＞に共通する統語構造と意味機能の関係について述べる。＜テ形節＞は、それが＜動詞節＞であるか、＜形

容詞節＞であるか、それとも＜形容名詞・名詞節＞であるかを問わず、みなある特定の**事象**(eventuality；出来事(event)・状態 (state)や**属性**(property)を含む)を叙述する。＜主文＞も同じように＜事象＞を叙述するので、＜テ形節＞が表す＜事象＞を**前件事象**(anterior eventuality)と呼び、＜主文＞が表す事象を**後件事象**(posterior eventuality)と呼ぶことにする。すべての＜テ形節構文＞に共通する意味機能の一つは、＜テ形節＞が表す＜前件事象＞の存在を**前提**(presuppose; presupposition)に、＜主文＞が表す＜後件事象＞が**主張**(assert; assertion)される、ということである。すなわち、＜前件事象＞と＜後件事象＞の間には、＜継起＞と＜並行＞の２種類の＜意味関係＞が見られるが、そのどちらの関係においても、＜前件事象＞の存在が＜前提＞となり、それに基づいて＜後件事象＞についての＜主張＞がなされているのである。＜テ形構文＞を構築する２つの＜構成素＞(＜テ形節＞と＜主文＞)の間に、＜構成素＞がその**線形順序**(linear order;すなわち＜左右行列＞)において必ず＜テ形節＞が＜主文＞に**先行する**(precede)ということは、あながち偶然ではなく、＜前提＞が＜主張＞に先行するという人間の**認知能力**(cognitive faculty)がそのまま＜文構成素＞の＜左右行列＞に**類像性**(iconicity)として反映されたものである、と思われる。

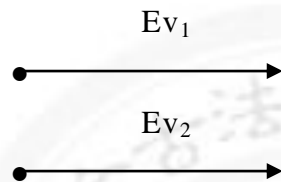
次に、いわゆる＜継起＞と＜並行＞の概念について検討して見よう。簡単に言うと、＜前件事象＞が起こってはじめて＜後件事象＞が起こるような関係にあることを＜継起＞と呼び、＜前件事象＞と＜後件事象＞が同時に存在したり、進行したりすることを＜並行＞と呼ぶわけである。すなわち、すべての＜事象＞はその＜内部構造＞において＜時間幅＞を持ち、その＜時間幅＞は、**起点**(starting point;あるいは＜始発点＞)、**経路**(path；あるいは**過程**(process))と**着点**(ending point;あるいは＜到着点＞)を含むものと分析することができる。＜継起＞においては、＜前件事象＞が＜着点＞に到達した後に、＜後件事象＞が始発するのに対し、＜並行＞においては、＜前件事象＞と＜後件事象＞がその＜経路＞の過程で同時に進行・

持続したり、存在したりするのである。＜前件事象＞と＜後件事象＞をそれぞれ‘Ev₁’と‘Ev₂’の記号で表し、その**事象構造**(eventuality structure)を図示すると、次のようになる。

(19) a. ＜継起＞



b. ＜並行＞



さらに、＜継起＞と＜並行＞の典型的な例文をそれぞれ(19)と(20)として次に掲げる。

(20) a. 信雄は[宿題を終えて(=終えてから)]床に就いた。

(前後継起)

b. 淑子は [それを見て(=見たとたん)] 驚いた。

(即時継起)

c. 林さんは [息子が東大の試験に受かって(=受かったの
で)] 喜んでいる。

(因果継起)

(21) a. 信雄は [大きく手を振って(=振りながら)] ウオーキングをした。

(同時並行)

b. [姉はフランス語が話せて(=話せ)] 妹はドイツ語が話せる。

(対比並行)

上掲の例文において、＜前後継起＞を表す＜テ形節＞は、＜テカラ節＞に言い替えることができ、＜即時継起＞を表す＜テ形節＞は、＜タトタン節＞で言い替えることができ、＜因果関係＞を表す＜テ形節＞は、＜タノデ節＞で言い替えることができる。また、＜同時並行＞を表す＜テ形節＞は、＜ナガラ節＞で言い替えることができるのに対し、＜対比並行＞を表す＜テ形節＞は、＜シ形節＞で言い替えることができる。このように、＜テ形節＞の意味機能を言い

換え(paraphrase)という具体的なテストで特定することができる。また、＜前後継起＞・＜即時継起＞と＜同時並行＞が一般に＜テ形節＞と＜主文＞に対して**同一主語**(identical subject；すなわち、＜テ形節の主語＞は、＜主文の主語＞と**同一指示**(identical subject)の＜空の代名詞＞(Pro)であることを要求するのに対し、＜対比並行＞は、一般に例文(21b)が示すように、＜テ形節の主語＞(‘姉’)と＜主文の主語＞(‘妹’)に異なる名詞句が使われる結果、**対比**(contrastive)の意味が生じ、また述語の中にも‘フランス語’と‘ドイツ語’のように＜対比＞を表す＜文要素＞が含まれることが多い。もう少し例文を挙げてみよう。

(22) a. [お爺さんは [山へ柴刈りに行って(=行き)], おばあさんは川へ洗濯に行った。

b. [太郎は経理を担当して(=担当し)], 次郎は庶務を担当している。

また、＜対比並行＞を表す＜テ形構文＞が＜同一主語＞をとると、(23)の例文のように、＜シ形節＞に言い換えることができ、＜シ形節＞のほうが＜テ形節＞よりも自然であると判断する母語話者がいる。

(23) 姉は[フランス語が{^(?) 話せて／話せ}]ドイツ語が話せる。しかし、主文の目的語の後ろに＜添加＞を表す＜係助詞＞「モ」が付くと、‘姉は [フランス語が{話せて／話せ}] ドイツ語も話せる’のように、＜テ形節＞と＜シ形節＞ともに自然な文となる。また、＜テ形節＞と＜主文＞の両方の目的語の後ろに＜提示＞や＜対比＞を表す＜係助詞＞の「ハ」が付き、＜テ形節＞は＜肯定文＞、そして＜主文＞は＜否定文＞であると、‘姉は[フランス語は{話せて／話せ}](=話せるが)、ドイツ語は話せない’のように、＜テ形＞も＜シ形＞も許容されるようである。

さらに、＜対比並行＞を表す＜テ形構文＞は、＜テ形節＞と＜主文＞に＜非同一主語＞を許して＜対比＞の意味を表すことが多いと同時に、＜テ形節＞と＜主文＞を置き換えても文の**認知的意味**

(cognitive meaning)は変わらない²⁹という特徴が見られる。

(24) a. [姉はフランス語が話せて]妹はドイツ語が話せる。

b. [妹はドイツ語が話せて]姉はフランス語が話せる。

以上の言語事実から、同じく＜副詞節用法のテ形節＞に属する構文の中でも、＜対比並行＞を表す＜テ形節＞は、＜文らしさの度合＞や＜節としての独立度＞がもっとも高く、その独立度は**順接**(additive)や**逆接**(adversative)を表す**重文**(compound sentence)に現れる**等立節**(coordinate clause)に近い性質を持っていることが伺われる。

＜対比並行＞を表す＜テ形節＞に次いで、＜節の独立度＞が高いのは、＜因果継起＞を表す＜テ形節＞であり、それを支持する証拠として、＜対比並行＞と＜因果継起＞のどちらの＜テ形構文＞においても、＜テ形節＞と＜主文＞の間に＜同一主語＞と＜非同一主語＞が許されるという事実が挙げられる。次の例文を比較されたい。

(25) a. 林さんは[息子が東大の入試に受かって] 喜んでいる。

(非同一主語)

b. 太郎は[{Pro/自分が}東大の入試に受かって] 喜んでいる。

(同一主語)

c. [{Pro/自分が}東大の入試に受かって] 太郎は喜んでいる。

(同一主語)

(25a)は＜非同一主語＞の例文であり、(25b, c)は＜同一主語＞の例文である。(25b, c)の＜テ形節の空主語＞が＜主文の主語＞を指すことは、これらの例文における**顕在照応形主語**(overt anaphoric subject)の‘自分’が＜主文主語＞の‘太郎’と＜同一指示＞であることから立証される。また、例文(25b)と(25c)の＜テ形節＞は、それぞれ＜主文＞の＜動詞句＞(VP)と＜屈折辞句＞(IP)に＜付加＞されているので、どちらのケースにおいても、＜テ形節の空主語＞の＜空の代名詞＞‘Pro’は、＜主文主語＞の‘太郎’に **C 統御**(C-command)されかつ、

²⁹ しかし、**情報構造**(informational structure)においては、＜テ形節＞よりも＜主文＞のほうに**情報焦点**(information focus)が当てられる、という違いが見られる。

‘Pro’ (‘PRO’) は<主文の主語>に<C 統御>され、<同一指示>であることができる、という**束縛原理 B (Binding Principle B)**を満たしている。<テ形節>と<主文>の間に<非同一主語>を許すという点で、<因果継起>の<テ形節>はそれを許さない<前後継起>や<同時並行>の<テ形節>に比べて <節の独立度>が高いと言えるが、<対比並行>の<テ形節>と<主文>の間のように<相互の置き換え>が許されないという点で、<対比並行>を表す<テ形節>に比べて<節の独立度>が低いと言える。すなわち、これら 4 つのタイプの<テ形節>は、<節の独立度>に関して(26)のような**ランキング(ranking)**や**ハイアラーキー (hierarchy)**の順序が見られる。

(26) 対比並行のテ形節 <因果継起のテ形節 <前後継起のテ形節 <同時並行のテ形節

また、以上の 4 つのタイプの<テ形節>と主文との間との関係が<並行的>である([+並行])か、それとも<並行的>でない([−並行])か、そして両者が<同一主語>をとることを許す([+同一主語])か、それとも許さない([−同一主語])かで、2 つの**素性(feature)**; すなわち、<並行>と<同一主語>)と 2 つの**値(value)**; すなわち、**プラス(plus)**と**マイナス(minus)**)を使って、(27)のように**交差分類(cross- classification)**をすることができる。

(27)

並行関係 \ 同一主語	同一主語	+ 同一主語	− 同一主語
	+ 並行関係	対比並行	同時並行
− 並行関係		因果継起	前後継起

すなわち、<並行関係>と<独立主語>の両方において、ともに<プラスの値>をとる<対比並行のテ形節>は、<節の独立度>がもっとも高く、<独立主語>だけが<プラスの値>をとる<因果継起のテ形節>は、それに次いで<節の独立度>が高く、さらに、

＜並行＞のみが＜プラスの値＞をとる＜同時並行のテ形節＞の＜節の独立度＞がそれに続き、＜並行関係＞と＜同一主語＞の両方においてともに＜マイナスの値＞をとる＜前後継起のテ形節＞は＜節の独立度＞がもっとも低い、ということになる。

しかし、すべての＜テ形構文＞がすんなりこの4つのタイプに納まるのであろうか。このような＜交差分類＞は、往々にして**連続相(continuum)**を成すので、2つのタイプの間に跨る中途半端な存在を示すような例文があるのではないか。

(28) a. [[春が過ぎて] 夏が来た]。

b. [[(私は)日本に生まれて] 米さえ満足に食えないとは]。

(28a)の例文は、＜テ形節の主語＞「春」と＜主文の主語＞「夏」が独立して存在し、＜対比＞の意味を表す上に、述語の「過ぎる」と「来る」も＜対比＞の意味合いを含むので、典型的な＜対比並行＞の＜テ形構文＞に属する、といえる。実際に、例文(28a)は、＜テ形節＞は例文(29a)のように＜シ形節＞に言い替えることができるが、「春が過ぎて、夏が来る」は、季節の交代の順序を表すので例文(29b)のような＜テ形節＞と＜主文＞の入れ換えはやや不自然である。しかし、例文(29c)のように＜テ形節＞を＜テカラ節＞に言い換えると、＜前後継起＞の意味合いが強すぎて、四季の間の自然な移り変わりという現実に悖るので、やはり不自然な例文になる。また、例文(29d)のように、＜テ形節＞を＜タノデ節＞に言い換えると、今度は＜因果継起＞の意味合いが強すぎてやや不自然に響く。

(29) a. [春が過ぎ、] 夏が来た。

b.[?][夏が来て] 春が過ぎた。

c.[?][春が過ぎてから] 夏が来た。

d.[?][春が過ぎたので] 夏が来た。

このような考察から、(28a)の＜テ形構文＞は、＜独立主語＞と＜対比並行関係＞の2つの基準に照らし合わせて、＜対比並行＞の意味合いを持つと解釈するのがもっとも自然であり、それに加えて＜前後継起＞の意味合いが含まれるのは、私たちの四季の移り変わりの

順序についての**現実世界に関する知識**(the real world knowledge)によってもたらされたものではないかと思われる。この間の事情を端的に物語るものに、例文(28b)がある。この例文に現れる<テ形構文>は、<並行関係>を表してはいるが、<独立主語>を擁してもいないので、その意味機能の構造に少し戸惑わされるが、<テ形節>と<主文>が<因果継起>、それも<順接の因果関係>ではなく、<逆接の因果関係>にあると解釈すべきであろう。その根拠として、この例文の<テ形節>は、順接の<タノデ節>ではなく、逆接の<タノニ節>に言い換えることができる。これは<主文>に意外性を表す<終助詞用法>の「とは」が使われているので、昔から米が豊作な豊葦原の瑞穂の国の日本に生まれたのに、米さえ食えないとは何たることか、という<逆接の因果関係>の解釈が**語用論的**(pragmatically)に可能になるためであろう。

- (30) a. *[(私は)[日本に生まれたので]米さえ満足に食えない
とは]。 (順接)
b. [(私は)[日本に生まれたのに]米さえ満足に食えないと
は]。 (逆接)

しかし、<テ形構文>の意味機能の解釈をさらに精緻なものにするためには、コーパスを広げて2つのタイプの間に跨る例文を検討するとともに、<テ形節>と<主文>の述語動詞の語彙アスペクトに目を向けて詳細な分析を加えることも必要であろう。

6. むすび

本稿では、<テ形節>の述語動詞・形容詞・形容名詞・名詞について<音声形式>及び<音韻変化>を整理して述べ、<テ形節>の<統語構造>としては、<テ形節>は<不定形節>であることをその<構成素>から検証した。また、副詞節用法の<テ形節>の<意味解釈>については、<副詞節>の<階層構造>との関連から捉えようとする見方の問題点を指摘し、さらには、<副詞節>としての<テ形節>は、<テ形節>と<主文>との間との関係が<並行

的>である([+並行])か、それとも<並行的>でない([−並行])か、両者が<同一主語>をとることを許す([+同一主語])か、それとも許さない([−同一主語])かの2つの**素性**と2つの**値**(+と−)を使って、**交差分類**(cross-classification)をした結果、<同時並行>・<前後継起>・<因果継起>・<対比並行>の4タイプに分類できることを提案した。今後の研究課題としては、本稿によって提示された<テ形節>の<意味解釈>の応用が実際に適切かつ円滑に行われるかを検証するために、現代語の口語・書面語だけでなく、さらに短歌・俳句や諺などからも用例を挙げて詮索することを試みたいと考える。本稿は、<副詞節>として機能する<テ形節>に重点を置いたが、<補文>として機能する<テ形節>については稿を改めて論じることにはしたい。

参考文献

- 尾上圭介「南モデルの内部構造」『月刊言語』第28巻11号、東京：大修館書店、1999a、95-102頁。
- 「南モデルの学史的意義」『月刊言語』第28巻12号、東京：大修館書店、1999b、78-83頁。
- 加藤彰彦・佐治圭三・森田良行(編)『日本語概説』東京：おうふう、1989。
- 加藤重広『みんなの日本語教室』東京：三笠書房、2001。
- 田窪行則「統語構造と文脈情報」『日本語学』第6巻5号、東京：明治書院、1986、37-48頁。
- 湯廷池「日本語文法の再検討：「形容動詞」か「形容名詞か」、『新世紀之日語教學研究國際研討會論文集』臺北：東吳大學日文系、2002、125-136頁。
- 『語言學、語言分析與語言教學(上)』臺北：致良出版社、2010a。
- 『語言學、語言分析與語言教學(下)』臺北：致良出版社、2010b。
- 『日語形容詞研究入門(上)』臺北：致良出版社、2012a。
- 『日語形容詞研究入門(下)』臺北：致良出版社、2012b。

- 「日本語のモダリティ」(未発表)、2012c。
- 湯廷池・佐伯真代「日本語「テ節」の再考」『東吳日本語教育』37号、臺北市：東吳大學日本語文學系、2011a、59-87頁。
- 「日本語「テ節」の統語構造と意味機能」『台灣日語學報』16号、臺中縣：台灣日本語教育學會、2011b、195-215頁。
- 野田尚史「副詞の語順」『日本語教育』52号、東京：日本語教育学会、1984、79-90頁。
- 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』東京：くろしお出版、1985、1-35頁。
- 松尾章「テ形の解釈と階層の関係」(神田外語大学言語科学研究センターワークショップ『統語と談話のインターフェイス』配布資料)、2010年3月22～23日。
- 南不二男「複文」時枝誠記・遠藤嘉基編『講座現代語』6巻、東京：明治書院、71-89頁、1964。
- 『現代日本語の構造』東京：大修館書店、1974。
- 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店、1993。
- 吉田妙子『テ形の研究——その同時性・継起性・因果性を中心に——』臺北：大新書局、1997。
- 『日本語動詞テ形のアспект』東京：晃洋書房、2012。
- 吉永尚『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』大阪：和泉書院、2008。
- Cinque, Guglielmo *Adverbs and functional heads: A cross linguistic perspective*, New York: Oxford University Press, 1999.